

対人支援点描 (32)

「スピリチュアルケアと公共性 (3)」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

4. チャプレン、スピリチュアルケア師と臨床宗教師

公共性と宗教性の狭間で、どのようにしたら適切なスピリチュアルな面のケアが可能となるのだろうか。この問題について二つの点を考慮しなければならないと思われる。一つは、仏教やキリスト教や神道などの個々の宗教の枠を超えた共通項を想定したものを想定することである。宗教性で見なされるものや、ここでテーマとして取り上げているスピリチュアリティという概念をもってして人間の普遍的な要素として、そういうものがあるという基盤を持つことである。つまり、身体や心 (精神)、社会といった対象と同じく、人間には特定の宗教に寄らないスピリチュアリティというものがあるのだから、それをケアの対象としなければならないという理屈が成り立つ。この関係は、宗教学の個々の宗教と宗教の関係にも似ている。だが、それでも問題はある。世の中に多種多様な宗教があったとしても宗教という名の宗教は存在しない。あるのは、個々の宗教とそれを信じるものだけである。世界宗教や普遍宗教と名の付く統合した宗教団体を作ったとしても、世の中にまた新たな宗教団体が増えるだけのことであり、世の中に宗教という

名の宗教がなく、宗教を信仰するという信仰は現実には存在しない。存在しないものをケアできるのかという問いかけが生じる。似た問題として、そもそも人間に心や精神という実態があるのか、という問いかけにも似ている。心理現象をすべて脳の働きや遺伝子の影響に還元する物質還元主義の立場である。心というものの実体に対して問題とされるならば、そもそもスピリチュアリティというモノがあるという見方は愚昧な思考と見なされるかもしれない。しかし、こうした疑念に対して注目したい動向がある。最近の認知心理学の潮流として神経神学や宗教認知科学と呼ばれる分野で、日本でも 2023 年に Newberg, A.(2018). *Neurotheology: How Science Can Enlighten Us About Spirituality*. Columbia University Press. の翻訳 (『神経神学』) が出版された。また人間の宗教に対する根源的な志向性についてバレット, J.L.(2023) 『なぜ子どもは神を信じるのか?: 人間の宗教性の心理学的研究』といった翻訳も出版されている。これらの研究はスピリチュアリティの実体を証明するものではないが、現象としてスピリチュアリティの存在があり、扱われる対象であることを示唆する。もしこれを否定してしまえば思考も

含めた心も社会も扱うことができないものとなってしまふ。

次にもう一つの考慮しなければならないことは、仮に人にスピリチュアリティというモノがあり、個々の宗教の宗教者がいたとして、宗教者が公共性をもって（スピリチュアルな）ケアに携わろうとした場合の解決策として公共的な立場や資格を確立することである。この動向としてチャプレン、スピリチュアルケア師、臨床宗教師という立場、資格をもってして公共性を担保して実社会では行われている。これはこれで現実的な対応であるといえる。しかし、この場合、個々の宗教の本質はスピリチュアルケアであり、個々の宗教は社会の制度の一形態であり、宗教者はその構成員に過ぎないということにならないだろうか。こうしたことから暗に自分が所属する宗教を否定するメッセージとなる。特にスピリチュアルケア師、臨床宗教師に対して私が耳にする実際に伝わっている批判にも、何か新しい宗教団体を作っているのではないか、自分の所属団体の布教をそのまますれば良いのではないか、といったものがある。仏教の場合、臨床仏教師という独自の資格制度を持ちケアの現場に入っている活動がある。これは“キリスト教”のチャプレンに近い活動であるといえる。だが、臨床仏教師では半ば公共性を実現できていない。なぜならば臨床“仏教”師という名称のとおり仏教間の宗派の枠に普遍性を持たせただけで仏教の立場の宗教的ケアの枠に留まっているからである。仏教の布教の延長といっても良い。話題を戻すが、チャプレン、スピリチュアルケア師、臨床宗教師という立場を別に作ることで公共性は担保され、スピリチュアルケアが可能となるのだろうか。これについては、そもそもスピリチュアルケアのあり方につ

いて今一度確認しなければならない。スピリチュアルケアとは、スピリチュアルなケアを必要とする人に、霊能者のようにスピリチュアルな何かを分け与えたり、施すことがスピリチュアルケアではない。スピリチュアルなケアを必要とする人が、その人のスピリチュアルな面をより良く機能するように“手助けすること”がチャプレン、スピリチュアルケア師、臨床宗教師の役目である。したがって、その行為そのものは公共性に反するものではなく、一つの好況におけるスピリチュアルケアの可能性の解決策となる。ただ問題は残る。所属団体との関係性、社会的な資格の認知や信用といったことである。こちらは思想や学問的問いというよりも実社会における問題といえるので、その活動が社会に如何に実装されていくかが問われている。

(つづく)